

「欲」・「愛」・「詩」・「書」・「文」・「旻」字考

——上海博物館蔵戦国楚簡を中心に——

塚 越 千 史

1. はじめに

楚簡研究において、「上海楚簡」¹⁾は内外の研究者が最も注目している資料の一つである。解読作業が進むにつれ、1993年に湖北省荊門市郭店1号楚墓から出土した「郭店楚簡」に見られるような道家系や儒家系の典籍以外にも、楚国にまつわる歴史的記述や文学作品の楚賦等、多岐の分野にわたる様々な文献を数多く含む貴重な文物であることが明らかになりつつあるからだ。この「上海楚簡」について、本稿では「欲」・「愛」・「詩」・「書」・「文」・「旻」の計6文字を取り上げ、文字学的見地からのアプローチを試みたい。

2. 上海楚簡について

最初に「上海楚簡」について紹介する。専門家による学術調査を経た「郭店楚簡」²⁾等とは異なり、「上海楚簡」は盗掘され骨董市場に出たという特殊な発見経緯を持つ。その詳細は馬承源氏「前言」(2001)³⁾や朱淵清氏「馬承源先生談上博簡」(2002)⁴⁾に詳述されており、以下に両者を参照しつつ項目別にまとめていく。

2. 1 発見・収蔵の状況について

発見と収蔵の状況について、両者の記述で共通する部分をまとめてみる。1994年春に香港の骨董市場に流出した竹簡群を、当時上海博物館館長であった馬承源氏が香港中文大学の張光裕氏の協力のもとに購入し、上海博物館に収

蔵した。同年冬、先に購入した竹簡と同じ特徴を持つ竹簡群が再び骨董市場に現れたので、歳末で財源不足の博物館に代わり、香港在住の有志による共同出資で計497枚の竹簡が購入され、上海博物館に寄贈された。朱淵清(2002)によると更にもう一回、香港の商人によって直接同博物館に持ち込まれた竹簡群があり、その内容は楚文字字書を含む数点の書籍とされる。この最後にもたらされた竹簡については枚数や購入時期、1994年に購入した竹簡群との関連性等詳しい情報は語られていない。以上の経緯により、上海博物館には合計3回に分けて戦国竹簡が収蔵されたことがわかる。しかし「上海楚簡」に属する竹簡は、そのすべてが一括して上海博物館に収蔵されたわけではないようだ。朱淵清(2002)によると、香港中文大学で所蔵する「緇衣」と「周易」の残簡については「上海楚簡」と綴合可能であることが既に確認されている。そして他に収蔵する研究機関があるという話も伝わってはいるが、いずれも未公表のため詳細は不明とされている。

2.2 真偽問題について

盗掘品として世に知られることとなった「上海楚簡」には、当然のことながら当初から真偽問題が付きまとった。購入を決断した馬承源氏が「上海楚簡」を本物であると判断した根拠を以下にまとめてみたい。

朱淵清(2002)で馬氏が語るところによれば、骨董市場に現れたときの竹簡の状態についての鑑定ポイントは3点あった。第一に竹簡群がひとかたまりの泥土の中からまとまって発見されたこと、第二に泥土から飛び出た部分の竹簡が自然光に含まれる紫外線に晒されて黒っぽく変色したこと、そして第三に泥土から取り出した竹簡に水分が不均等に蒸発することから生じる変形が見られたこと。以上3つの観点から、長い年月を経て土中から掘り起こされた出土遺物であると結論づけられた。ひとかたまりの泥土からまとまって発見されたため偽物が混在する余地はなく、最近作られた偽物であれば竹簡の変色や変形は起こりえない現象であるという。竹簡には科学的な年代測定も行われた。馬承源「前言」(2001)によると、「上海博物館竹簡様品的測量証明」と中国科学院

上海原子核所超靈敏小型回旋加速器室譜計実験室の測年報告により、戦国晩期という測定結果が得られた。朱淵清（2002）では、この測定結果の具体的な数値として「距今時間為 2257 ± 65 年」と公表されている。炭素 14 による年代測定法では西暦 1950 年を起点に算出する⁵⁾ため、このデータを西暦に換算すると 68% の確率で前 372 年から前 242 年の間に入る。原資料の年代を知る上で、一つの大まかな目安となるだろう。また、竹簡の文字や内容についても検証が行われた。馬承源「前言」（2001）によると、竹簡の文字には典型的な楚国文字の特徴が見られた。内容については一部に歴史的記述があり、その多くが楚国に関わりがあること、更に戦国晩期の作と考えられる賦の残簡の存在が明らかとなった。1998 年に出版された『郭店楚墓竹簡』と比較してみると、「郭店楚簡」中の「緇衣」篇と「性自命出」篇と同じ内容の竹簡の存在が判明し、「上海楚簡」では「紵衣」篇、「性情論」篇と名付けられ馬承源（2001）に収録されている。博物館側は以上の状況から総合的に判断して、「上海楚簡」は楚国が郢都から遷都する紀元前 278 年以前の貴族の墓に埋葬された副葬品ではないかと推測している。

発見時の状況や初期段階での検証については当事者の証言を参考にし、「上海楚簡」は本物の戦国楚簡であると考え、本稿での調査対象に選択した。

2. 3 上海博物館による整理報告書について

「上海楚簡」の写真図版及び釈文は、『上海博物館蔵戦国楚竹書』の書名で上海古籍出版社より全 6 分冊で刊行予定である。朱淵清（2002）によれば、同書名で公開される資料は 1994 年の春と冬に購入された前 2 回分の竹簡で、3 回目の購入分である字書類は含まない。第 1 回購入分の竹簡枚数は明言されていないが、前 2 回分を合わせると計 1200 余枚、約 3 万 5 千字にのぼる。2004 年 10 月現在までに馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』（2001）、同氏主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（二）』（2002）、同氏主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（三）』（2003）の計 3 冊が既刊であり、本稿では第 3 分冊までを調査対象とした⁶⁾。

3. 本稿の目的と調査方法

文字研究は古来より、主に文字の構成要素を「形」・「音」・「義」の3分野から分析する方法で進められてきた。ところが楚系文字は緩やかな曲線を帯びた筆画を特徴とするため、構成要素のどの部分が意符で、どの部分が声符なのか、各パーツごとに丁寧に吟味していく必要がある。また「飾筆」と呼ばれる意味や発音の弁別には寄与しない筆画も多用されるため、難読文字も少なくない。字形だけで字義が判断できない場合、有力な手がかりとなるのが文脈である。文字構成に不明な箇所があっても文脈の力を借りて推測すれば、ある程度字義の特定をすることは可能になる。

これまでの楚簡資料は副葬品リストや書簡等当時の記録文書が多く、文脈を追ったり他の資料と比較したりするという作業は困難であった。しかし「郭店楚簡」の出土により、様相が一変した。「郭店楚簡」には道家系や儒家系の典籍が多数含まれており、例えば郭店「緇衣」篇と通行本『礼記』「緇衣」篇、郭店「五行」篇と馬王堆帛書「五行」篇というように、伝世文献や他の簡帛資料と比較対照可能な文献が発見されたからである。「郭店楚簡」は言わばロゼッタストーンのような役割を果たし、楚系文字解読を大きく前進させるきっかけとなった。続いて発見された「上海楚簡」にも、「絺衣」篇や「周易」等伝世文献と内容が重なる資料が多数含まれているため、より一層の楚系文字研究の進展が期待されている。

「上海楚簡」の資料公開は始まったばかりだが、『上海博物館蔵戦国楚竹書』をベースに日々膨大な数の研究論文が発表されている。文字学関連の論文について見てみると、その多くは読めない文字をどう読むかという点について論証しており、読めた文字についてどのような特徴が見られるかを網羅的に述べたものはまだない。専門に編集された楚系文字字典としては滕壬生 (1995)⁷⁾ や李守奎 (2003)⁸⁾ が挙げられるが、近刊の李守奎 (2003) であっても収録される竹簡は2000年に公開された「郭店楚簡」までで、刊行中の「上海楚簡」は未収である。

「上海楚簡」は公開途上の資料とは言え、博物館の報告書をはじめとして既に積字・積文に関する研究は相当量蓄積されている。また既出の楚簡についても、例えば「郭店楚簡」や「包山楚簡」等はそれぞれ専門の積文や文字編が出版されており、参照可能な資料が多いのは大変な強みである。そこで本稿では「上海楚簡」に見られる字形的特徴を分析する研究の第一歩として、『上海博物館蔵戦国楚竹書』をはじめとする種々の先行研究を踏まえ、異論が少なく解釈がほぼ確定した文字をいくつか選択して、それらを字書的に他の楚簡資料と比較検討する作業を行った。サンプルとして選択した文字は道家系や儒家系文献で常用される「欲」、「愛」、「詩」、「書」の4字、更に「上海楚簡」中で文脈によって書き分けがなされていると考えられる「文」、「旻」の2字を加えた計6文字である。

本文中で引用した参考文献については、初めて引用した箇所ですべて随時レファレンスを注記し、以後は簡略表記する形式をとった。その他執筆に当たり参照した主な論文・刊行物は、本稿末尾の「主要参考文献一覧」にまとめて掲載した。また本文中で上古音に言及する場合は特に注記していない限り、郭錫良著『漢字古音手冊』（1986）を参照したものである。手書きの楚系文字は、筆者が原本を参照し模写したものである。

以下、個別に各文字について検討していきたい。

3. 1 「欲」字について

「欲」の意味で用いられる字形は、「上海楚簡」では3タイプの書き方が見られる。篇名ごとに出現状況を一覧表に整理すると、次の通りである。

文字の種類	該当例一覧
1) 谷 (谷)	「孔子詩論」… (16 - 40) (数字は第16簡第40字目の意。 以下同様に示す。 「性情論」… (26 - 34) (27 - 3) (27 - 9) (27 - 16) (27 - 22) (27 - 28) (28 - 1) (28 - 6) (28 - 13) (31 - 25) (31 - 29) 計12例

2) 𧇗 (欲)	「魯邦大旱」… (4 - 31) (5 - 14) 「周易」… (55 - 23) 「彭祖」… (2 - 52)	計4例
3) 𧇘 (慾)	「互先」… (3正 - 39) (4 - 34) (5 - 4)	計3例

まず、上記3タイプの字形の通仮関係について簡潔にまとめたい。「谷」字の上古音は見母屋部であり、「欲」字と「慾」字は共に余母屋部に属する。余母は見母と相諧する例がある⁹⁾。また「谷」字と「欲」字、「欲」字と「慾」字の通仮用例は伝世文献にも数多く見られる¹⁰⁾ため、解釈の面では特に問題はないと考える。

「上海楚簡」で最も多く見られる書き方は1)の「谷」だが、「郭店楚簡」においても同様に「谷」を用いる用例が最も多い¹¹⁾。2)の「欲」字については、右傍の「欠」字は甲骨文や西周金文の「欠」字の書き方とほぼ一致する¹²⁾。よって「欲」の右傍である「欠」字の書き方は、甲骨文や金文の流れを汲む古い書法の名残りを留めるものと言えるだろう。ところが「欲」字については他の楚簡と比較してみると、「上海楚簡」の書き方は実のところ少数派で、「郭店楚簡」¹³⁾ほか「天星觀楚簡」、「信陽楚簡」¹⁴⁾、「九店楚簡」¹⁵⁾に見られる「𧇗(欲)」という字形の方が多く用いられていることがわかる。右傍に着目すると、この「欠」字の左側には二つの点が打たれており、「次」字の字形に近似して見える。「欲」字については、楚系文字では音韻上異なる「欠」字または「次」字、「次」字が偏旁になった場合、字形上は区別されないという大西氏の論証¹⁶⁾を参考にすると、「欲」字も「欲」の意味で解釈することが可能となる。加えて「郭店楚簡」では3)の「慾」字の省略化が進んで「𧇘」¹⁷⁾、「𧇙」¹⁸⁾といった字体も使われている。この二種類の書き方は同一篇中に集中して現れるため、それぞれの書き手に特有の崩し方ではないかと考えておきたい。

3. 2 「愛」字について

「愛」の意味で用いられる字形は、「上海楚簡」では大きく2タイプの書き方が見られる。篇名ごとに出現状況を整理すると、以下の通りである。

文字の種類	該当例一覧
1) ① 𠂔 (悉)	「孔子詩論」… (17 - 21) (27 - 11) 「紂衣」… (13 - 33) 「性情論」… (34 - 5) (34 - 10) 計8例
② 𠂔 (悉)	「孔子詩論」… (17 - 27) (23 - 2) 計2例
2) 𠂔 (𠂔)	「孔子詩論」… (11 - 2) (15 - 5) (15 - 15) 計3例

字形分析に入る前に「魯邦大旱」に見られる2つの用例について、少し補足説明をしておきたい。馬承源(2002)で「魯邦大旱」の釈文を担当した馬承源氏は、当該字を「愛」に作って「𠂔」に読み、「瘞(埋める)」の意味で解釈している。しかし、この解釈には多くの研究者から賛否両論が出されている。そのため本稿では、曹峰氏『『魯邦大旱』初探』(待刊稿)の論証に従って「愛」に読んで「惜しむ」の意味で解釈し、「愛」字の例文に含めた。

それでは『説文』大徐本¹⁹⁾を参照し、字形分析を進めていこう。「愛」字は「愛、行兒。从攷悉声。」(5下14a)とあり、「悉」字が声符になっていることがわかる。同様に「悉」字を調べると、「悉、恵也。从心死声。𠂔古文。」(10下14a)とある。「愛」字も「悉」字も共に上古音は影母物部に属する。分析を進めて「悉」字の声符である「死」字を大徐本で調べると、「死、飲食氣并不得息曰死。从反欠。今變隸作死。𠂔古文死。」(8下12a)とあり、上古音は見母物部に属する。喉音の影母と舌根音の見母との相諧例がある²⁰⁾ため、「死」字が「悉」字の声符となることも音韻上問題はない。

以上を踏まえて上記の一覧表を見ると、1)の①タイプは「死」字の古文「𠂔」に「心」がついた字形であることがわかる。②のタイプは字義上の相違はないが「夫」のように反転しているので、1)の②として下位分類した。字形上類似点の多い「郭店楚簡」と比較してみると、1)の①と近似する字形は「緇衣」篇の「𠂔」(3.25)1例だけである²¹⁾。しかし子細に見ると、上部が「𠂔」と「𠂔」に筆画を分けて書かれている点が異なる。当該字が1)の①のように書こうとして筆画が分かれたただけなのか、次に見る「尊徳義」篇「𠂔」(10.26)を反転させて書いたのか、判断に迷うところである。私見では筆勢や墨の濃さ

から推測し、(3.25) は (10.26) の反転と考え、1) の①とは別の字形であるとした。次に1) の②についてだが、同じ書き方をしているのは「尊徳義」篇の「卷」(10.33) 1例のみである。「尊徳義」篇では「愛」字はほかに2例(両字とも10.26)あり、こちらは前掲通り「𠂔」と書かれている。当該字中央部分「イ」は他字と比較して、明らかに意識して「人」字を書いたものと見て取れることから、前章で取り上げた「欲」字右傍と同形であると言える。「郭店楚簡」で最も多く見られる字形は上部の筆法に多少バリエーションがあるが、(10.26)の字体から「人」の部分省いた「𠂔」(1.1.36)である²²⁾。

全編同一の書き手による書写と考えられる「尊徳義」篇という一篇の中で、二通りの書き方が混在するのは興味深い。更に第26簡と第33簡では「則」字も共通して用いられるが、第26簡では「𠂔」のみ、第33簡では第26簡の字形と「𠂔」の2種類の字形が混用される²³⁾。つまり、同一簡中でも字形が異なるわけである。同一の書き手においてすら同一の字義で複数の字形が用いられるというのは、現代の規範化された文字使用に慣れてしまった感覚から類推すると、読む側にとってもかなり不便ではなかったかと考えられる。字義を正確に伝えようとするならば、規範化された文字を使用する方が文字の「伝達記号」としての役割を存分に発揮できるはずである。しかし古代の書き手は、おそらく字形の規範性よりも文字構成の正確さに意識を払っていたのだろう。声符や意符の組み合わせが合っていれば正しい文字認識が可能となるため、声符や意符に複数のバリエーションが生ずる。例えば「𠂔」字の場合であれば、声符には「𠂔」字の古文「𠂔」でも「欲」字の右傍である「欠」字(実は「次」字²⁴⁾)でも、どちらを用いてもかまわないという意識が働いていたのではないかと推察される。

このほか「郭店楚簡」では、大徐本で「𠂔」字の古文として記載される「𠂔」字に近似した字形も用いられている。張光裕(1999)では「𠂔」字の項に一括して整理している²⁵⁾が、字形に忠実な分類とは言えないだろう。上述の各論証を踏まえ、李守奎(2003)のように「𠂔」字の項目を立ててその下に分類するほうが望ましいと考える²⁶⁾。

2) の「虫」字を伴う字形は今のところ類例がなく、「上海楚簡」に独特の書き方と言える。「虫」字の機能が意符なのか単なる飾筆なのか、現段階では俄に判断しがたい。「虫」字が付加される理由の究明は、今後の課題としておく。

3. 3 「詩」字について

「詩」の意味で用いられる字形は、「上海楚簡」では5タイプもの書き方が見られる²⁷⁾。以下、篇名ごとに出現状況を一覧表にまとめる。

文字の種類	該当例一覧	
1) 𠄎 (寺)	「孔子詩論」… (2-1) (4-11)	計2例
2) 𠄎 (𠄎)	「孔子詩論」… (1-12) (4-2) 「性情論」… (8-22) (9-0)	計4例
3) 𠄎 (時)	「民之父母」… (8-13)	計1例
4) 𠄎 (志)	「民之父母」… (3-27) (3-31) (7-34)	計3例
5) 𠄎 (詒)	「民之父母」… (1-6)	計1例

表中2) の「性情論」で (9-0) という表示をしたのは、馬承源 (2001) 「性情論」篇積文233ページを参照すると、第9簡の簡首は損傷が激しく冒頭の「人」字だけがかろうじて判読できる状態のため、「性情論」の整理者が「郭店楚簡」の「性自命出」篇より補ったからである。

字形分析のために『説文』大徐本を引用すると、「詩」字は「詩、志也。从言寺声。𠄎古文詩省。」(3上5a) とある。表中の分類通りに1) から4) まで検討していくと、1) は「言」旁を省いた字形、2) は「詩」字の『説文』古文、3) は1) に「口」字の飾筆がついて繁文化したものと考えられる。それぞれの上古音を調べると「詩」字は書母之部、「寺」字邪母之部、「志」字は章母之部である。韻部は同一であり、書母と章母は共に舌上音に属し、歯頭音の邪母とは通仮可能である²⁸⁾。そのため先に引用した『説文』大徐本の記述に見られるように、「志」字を「詩」字の説解に用いることができる。問題となるのは5) のタイプである。伝世文献との比較から、当該字を「詩」と読むことについて

は研究者各氏の見解は一致している²⁹⁾。しかし、当該字の右傍の書き方は大変独特である。本稿では暫時、「民之父母」第1簡に用いられている「之」字を参考にその訛変として「詔」に作り「詩」と読む西山氏の論証に従うが、尚検討の余地があると考えている。現段階では当該字と同様の事例が見当たらないため、これも今後の検討課題に加えておく。

3. 4 「書」字について

「書」の意味で用いられる字形は「上海楚簡」では1タイプ「𠄎」で、しかも「性情論」の(8-23)と(9-6)計2例のみである。この2例も前章『詩』の用例で挙げた「性情論」(8-22)、(9-0)と同様に『詩・書・礼・楽』と書名を列挙する字句中に現れ、やはり『書経』という書名として用いられている。『説文』大徐本を参照すると、「書」字は「書、箸也。从聿者声。」(3下11a)とあり、「箸」字は「箸、飯馘也。从竹者声。」(5上4b)とあるが、『説文』「許序」に「箸³⁰⁾於竹帛謂之書」(15上1a)という記述があるように、「書」字と「箸」字は字義上も音韻上も近い関係にある。上古音を調べると「書」字は書母魚部、「箸」字は定母魚部である。韻部は同一で、舌上音の書母と舌頭音の定母は相諧例がある³¹⁾ため通仮可能である。

この第8簡と第9簡は、「郭店楚簡」の「性自命出」篇の第15簡、第16簡とほぼ同文³²⁾なので、両者を比較してみよう。文脈から字義を推断することが可能なため、「上海楚簡」の当該字を「書」の意味で解釈するのは問題ない。しかし「郭店楚簡」の2例と「上海楚簡」の2例とは、完全に同一の字形ではない。上部に横筆一画の飾筆つきの竹冠が用いられているのは共通するが、下部の書き方に注目すると、「郭店楚簡」では「𠄎」と書いて「者」字がはっきり認識できるが、「上海楚簡」では「𠄎」となっている。何琳儀氏が指摘する通り、これは「者」字が「皿」字と混用され訛変した形であろう³³⁾。確認のため、そもそも「皿」旁に従う文字と比較してみると、当該字に近似した字形が「郭店楚簡」の「唐虞之道」篇「𠄎(盛)」(7.2)に見られる³⁴⁾。この事例からも、何氏の見解は妥当であると考えられる。

3. 5 「文」字と「旻」字について

「上海楚簡」では字義による明確な字形区分の一事例として、「𠄎（文）」字と「𠄎（旻）」字の書き分けが観察できる。すなわち「文王」を意味する場合には「文」字が、「文章」や「文彩」等一般的な意味で用いられる場合には「文」字に「口」字を加えた「旻」字を用いるという区別がなされている³⁵⁾。出現状況を篇名ごとに一覧表にまとめると、次のようになる。

文字の種類	該当例一覧
1) 𠄎（文）	「孔子詩論」… (2 - 3) (7 - 16) (7 - 31) (21 - 44) (22 - 40) (24 - 14) 「紂衣」… (1 - 27) (17 - 26) 「容成氏」… (46 - 6) (46 - 40) (47 - 16) (47 - 20) (47 - 41) (48 - 37) (49 - 25) (49 - 35) <p style="text-align: right;">計 16 例</p>
2) 𠄎（旻）	「孔子詩論」… (1 - 20) (3 - 31) (5 - 30) (6 - 4) (6 - 11) (8 - 23) <p style="text-align: right;">計 6 例</p>

「文」字と「旻」字が文中で対比的に用いられているのが「孔子詩論」のみであるため、この書き分けをあまり重視しない意見もある³⁶⁾。しかし子細に検討すると上記一覧表のように、「文」字 16 例は「文王」の意で、「旻」字 6 例は一般的な意味で用いられている。また、「文王」の用例しか出現しない「紂衣」篇や「容成氏」篇においても「文」字と「旻」字が混用されることはなく、すべて「文」字が用いられている。よってこの 2 篇の書き手は「文王」に言及する際、意識して「文」字を選んで書写したと考えられる。私見では「上海楚簡」以外で同様の書き分けがなされている例はないが、ある特定の文脈における特殊な文字遣いであった可能性も考慮しつつ、引き続き調査を進めていくつもりである。

4. まとめ

本稿で論じたことを以下のようにまとめておこう。字義を限定して字形的特

徴を見るパターンとしては「欲」・「愛」・「詩」・「書」の4字を、そして字形から字義が限定されるパターンとしては「文」・「𠄎」の2字について考察した。

「上海楚簡」の「欲」の意味で用いられる字形は「谷」が主流で、「欲」に作る場合も他の楚簡に見られる飾筆ありの字形ではなく、飾筆なしの比較的古風な字形が用いられていることがわかった。「愛」字の『説文』古文を構成要素に持つタイプの字形については、「欲」字で参照した大西氏の「欠」字に関する音韻学的論証により、正確な字形認識が可能となった。これらは字義を端緒にした字形認識の成果の一端と言えるだろう。その一方で、「愛」の「𧈧」字も含め「詩」字と「書」字の字形には、伝世文献を手がかりに字義は特定できても字形の認定に更なる課題が残るものがあった。古代の書き手がどのような意識をもって文字を綴っていたのか、字形のバリエーションの多さから生じる様々な問題点を分析し、より一層文字構成を正確に把握する必要があるだろう。

また、字形から字義が限定される「文」字と「𠄎」字のようなパターンについては、「文王」を意味する場合には「文」字が、「文章」や「文彩」等一般的な意味で用いられる場合には「文」字に「口」字を加えた「𠄎」字が用いられていることが判明した。これは字義による機械的な書き分けなのか、あるいは「文王」に対する特別な意識の現れなのか、今後も検討を重ねていきたい課題である。

『上海博物館蔵戦国楚竹書』の続刊を待ちつつ、次稿以降も「上海楚簡」を中心とした字義から字形的特徴を探る研究を進めていく予定である。

注

- 1) 本稿では、後述する『上海博物館蔵戦国楚竹書』に所収の竹簡を総称して「上海楚簡」という名称を用いる。
- 2) 「郭店楚簡」の発掘報告は、湖北省荊門市博物館「荊門郭店一号墓」(『文物』1997-7)を参照。図版と釈文が初めて全面公開されたのは、荊門市博物館編『郭店楚墓竹簡』文物出版社(1998)による。
- 3) 「前言：戦国楚竹書の発現保護と整理」は、馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹

書（一）』上海古籍出版社（2001）に所載。

- 4) 上海大学古代文明研究中心・清華大学思想文化研究所編『上博館藏戦国楚竹書研究』上海書店出版社（2002）に所載。
- 5) 炭素 14 による年代測定法については、国立歴史民俗博物館の HP「弥生時代の開始年代について」中に詳述されている解説を参照。URL は <http://www.rekihaku.ac.jp/kenkyuu/news/>。
- 6) 各分冊に収録される篇名は次の通り。馬承源（2001）：「孔子詩論」、「紂衣」、「性情論」。馬承源（2002）：「民之父母」、「子羔」、「魯邦大旱」、「從政（甲・乙篇）」、「昔者君老」、「容成氏」。馬承源（2003）：「周易」、「中弓」、「互先」、「彭祖」。
- 7) 滕壬生編著『楚系簡帛文字編』湖北教育出版社（1995）。
- 8) 李守奎編著『楚文字編』華東師範大学出版社（2003）。
- 9) 董同龢著『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所出版（1967）、P28～P29 参照。
- 10) 高亨纂著『古字通仮会典』（1997）齊魯書社、P332～P333 参照。
- 11) 張光裕主編『郭店楚簡文字研究 第一卷文字編』芸文印書館（1999）、P375～P376 を参照すると、計 30 例が収録されている。
- 12) 徐仲舒主編『漢語古文字字形表』四川人民出版社（1980）によると、「欲」字の事例は P348 に「楚詛文」が挙げられているが、甲骨文と金文の事例はない。そのため「欠」字の書き方は P347 の「欽」字を参照すると、甲骨文から金文、さらに「楚帛書」へと続く字形の変遷を辿ることができる。
- 13) 張光裕（1999）P257 に 4 例挙げられている。
- 14) 滕壬生（1995）P709 では、「天星觀楚簡」2 例、「信陽楚簡」1 例を記載するが、李守奎（2003）P531 では「天星觀楚簡」の文字を 3 例挙げている。李守奎（2003）「出処表」によると、滕壬生（1995）に依拠したとあるが、一文字増えた理由については不明である。「天星觀楚簡」は未公開資料のため、滕壬生（1995）以外に確認する手段はない。しかし李守奎（2003）の 3 字を見比べても字形上は大差がないと判断できることから、本稿では 3 例同等に扱う。
- 15) 湖北省文物考古研究所・北京大学中文系編『九店楚簡』中華書局（2000）より図版 P13、釈文 P50、注釈 P106 を参照。

- 16) 「欠」字(談部)と「次」字(元部)の音韻関係についての詳しい論証は、大西克也氏「談談郭店楚簡『老子甲本』「警」字的読音和訓釈問題」、『中国出土資料研究』第4号(2000)P76を参照。
- 17) 張光裕(1999)P257、「緇衣」篇の2例。
- 18) 張光裕(1999)P257、「語叢二」篇の6例。
- 19) 『説文解字』中華書局(1999)を参照。大徐本引用は以下も同書とする。
- 20) 董同龢(1967)P34～P38を参照。
- 21) 張光裕(1999)P189参照。以下「尊徳義」篇についても同ページを参照。同書では「老子甲」篇(1.1)から「語叢四」篇(16)に至る計18篇各編に通し番号を振り、コンマ後の数字でその篇中の第何簡に出現するかを示す。(3.25)は、「緇衣」篇の通し番号が(3)で、その第25簡に当該字が用いられていることを示す。「尊徳義」篇の番号は(10)である。
- 22) 張光裕(1999)P189に計18例挙げられている。
- 23) 張光裕(1999)P577～P579を参照。
- 24) 3.1で注記した大西氏論文を参照。さらに何琳儀著『戦国古文字典』中華書局(1998)下冊P1196にも「无旁或以欠旁為之作𠄎、𠄎、𠄎、𠄎。加=為飾者、在楚系文字習見。」との指摘がある。
- 25) 張光裕(1999)P189に計8例挙げられている。
- 26) 李守奎(2003)P612を参照。
- 27) 季旭昇主編『上海博物館蔵戦国楚竹書(二)』読本』万卷楼(2003)の「民之父母」篇訳釈P4参照。釈文担当の季旭昇氏が「戦国楚簡中『詩』字有很多種不同的写法。」と述べ、「郭店楚簡」の事例を多く掲げているように、「詩」字は字形のバリエーションが豊富な文字の一つである。
- 28) 董同龢(1967)P30を参照。
- 29) 馬承源(2001)「民之父母」篇注釈P155、季旭昇(2003)「民之父母」篇訳釈P4～P5、並びに上海博楚簡研究会編『出土文献と秦楚文化』創刊号：西山尚志・小寺敦・谷中信一著『上海博楚簡「民之父母」「子羔」「魯邦大旱」訳注』東京大学文学部東洋史学研究室(2004)より西山氏「民之父母」訳注P6を参照。

- 30) 大徐本では「著」字に作るが、段玉裁著『説文解字注』（1999）芸文印書館に「箸各本作著。今正从竹。」とある。ここでは段注に従い、「著」字を「箸」字に正して引用した。
- 31) 董同龢（1967）P18を参照。
- 32) 馬承源（2001）「附二 上博簡『性情論』与郭店簡字形对照表」P285を参照。
- 33) 何琳儀（1998）上冊 P516に「楚系文字或誤譌作𠄎、𠄎，下與皿旁混同。」とある。
- 34) 張光裕（1999）P300、「盛」字の項を参照。
- 35) 馬承源（2001）「孔子詩論」字釈 P126を参照。
- 36) 季旭昇主編『「上海博物館藏戰国楚竹書（一）」読本』万卷楼（2004）「孔子詩論」篇訳釈 P8で、釈文担当の鄭玉姍氏は「足見二形看似有區別，其實未必。」と述べている。

〈主要参考文献〉

- ・張光裕主編『包山楚簡文字編』芸文印書館（1992）
- ・饒宗頤・曾憲通著『楚地出土文献三種研究』中華書局（1993）
- ・陳偉著『包山楚簡初探』武漢大学出版社（1996）
- ・東京大学郭店楚簡研究会編『郭店楚簡の思想史的研究』第一卷～第六卷
東京大学文学部 中国思想文化研究室（1999～2003）
- ・李零氏「説『楚系簡帛文字編』」、『出土文献研究』第5集
科学出版社（1999）
- ・劉信芳著『子弹庫楚墓出土文献研究』芸文印書館（2002）
- ・李零著『郭店楚簡校讀記（増訂本）』北京大学出版社（2002）
- ・簡帛研究網站 <http://www.jianbo.org/>

[付記] 本稿執筆に当たり、大西克也東京大学大学院助教授より多くの御教示を賜った。心より感謝申し上げます。

（つかごし ちふみ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）